

石巻復興 NEWS

石巻専修大学経営学部 丸岡ゼミ 平成26年7月31日発行 第33号

にっぽん丸石巻港へ

6月12日(木)昼、石巻港中島埠頭に大型客船「にっぽん丸」(166.5m、22,472トン)が着きました。

この日はあいにくの暴風雨(!)。条件是最悪でした。横からの雨にぬれないように市から借りたブルーシートをテントの側面に張りました。が、岸壁のテントの屋根にはすぐ水が溜りまわりを濡らしました。

これまで客船歓迎に協力してきた石巻専修大学の庄子ゼミ、丸岡ゼミのほか、今回は大浪健一特命教授と先生のゼミ学生、佐々木万亀夫経営学部長にもご協力をあおぎ、岸壁での歓迎活動を行いました。

庄子ゼミは石巻焼きそばの準備をしました。400人分の焼きそば材料を用意したため、雨が振っても簡単には中止に出来ないほど市のお金もかかっています。テントを押さえながらの調理が大変だったようです。

丸岡ゼミは初めて、岸壁外でお客さんを歓迎する用意をしました。防災関連の展示をした市内魚町の宮城エクスプレス(株)5階の「石巻 3.11 あすのためのミュージアム」と、牡蠣の歴史紹介をした万石浦そばの牡蠣養殖・流通業の末永海産(株)です。が、悪天候と宣伝不足により、両施設への訪問者は各2名のみでした。

岸壁では、初めて市内の民間団体の協力を得ました。雄勝硯生産販売協同組合、震災後スペインタイルの製造・販売を行う「みなとまちセラミカ工房」(宮城県女川町)、ミサンガの製造販売をしている「マザーミサンガの会」(石巻市雄勝町)、鹿の角を使ったアクセサリー「OCICA」の販売を行う一般社団法人「つむぎや」、石巻鹿妻で布の手芸品製造を行う「ばっばコーポレーション」です。また、女川町の宿泊施設「エル・ファロ」からも手助けをいただき、学生とともにこれから団体のグッズ販売の支援をしました。

このような新企画で岸壁の土産物売り場(一部体験もあり)は充実したはずでしたが、雨の中でしたので、多くのお客様が訪れるにはいたりませんでした。次回のために改めて準備をしておきたいと思います。

(丸岡泰)



協力団体

◇女川町宿泊村協同組合「エル・ファロ」(佐々木里子理事長／営業：中村志郎)

宮城県牡鹿郡女川町清水町174。女川町トレーラーハウス宿泊村。今回、中村さんに岸壁の総合指揮を依頼。＜学生の声＞中村さんと一緒に船を歓迎して感じたことは、初対面の人とのコミュニケーション、お客様の一人ひとりに対応したコミュニケーションが大事だということです。(大瀧裕也)

◇雄勝硯生産販売協同組合(澤村文雄理事長／高橋頼男)

雄勝硯、スレート、玄昌石皿、玄昌花器などを生産・販売。東日本大震災による津波によって組合員と従事者4名が犠牲に。雄勝硯・石・スレート関連産業が壊滅。雄勝の硯は震災前、日本の硯生産の約90%を占めた。雄勝石は東京駅の屋根にも。雄勝石の新しい可能性として「多目的プレート」「長方形花器」「石皿」がある。＜学生の声＞私は、雄勝硯生産販売協同組合さんの硯や雄勝石を使った食器の販売の手伝いをさせてもらいました。硯に興味を持ってくれる人は多くいますが、購入してくれたのは1人だけでした。やはり商品を買ってもらうにはそのよさを知っていなければならないし、お客さんに伝える能力も必要だと私は感じました。また、組合の人はパンフレットを配り、雄勝硯のことを知ってもらうだけでも意味があると言っていたので、イベントのとらえ方が違うと感じました。(涌井翔太)

◇OCICA

石巻市牡鹿半島の東浜地区で女性たちが製作する鹿の角と魚網の糸等を使ったハンドメイドアクセサリー。

◇一般社団法人つむぎや(友廣裕一代表／斉藤里奈)

鹿の角を使ったアクセサリー「OCICA」や漁網を使ったミサンガなどを、外部人材(デザイナー)と地域住民の協業によって新商品の開発をサポート。販路開拓までを一貫して支援し、地域に根ざした持続的な仕組みの構築を目指す。地域の基幹産業復興から、仕事を失った方への応急的な雇用創出、土地に根ざした仕事づくりまで、地域に必要とされる形で復興に寄与。

＜学生の声＞私の担当したOCICAでは、ピアスとネックレスを1つずつ販売することが出来ました。今回、学外の方と一緒に活動したことによってすごく成長できたと思います。自分が動かなければいけないときや販売する以前にお客さんと会話することで打ち解けることの必要性など、以前の歓迎イベントでは学べなかったことをたくさん学ぶことが出来ました。(高橋賢臣)

◇ばっばコーポレーション(斎藤ヒロ子代表)

石巻市鹿妻地区の60代の女性6人のグループ。2012年9月発足。残った衣類などの支援物資を再生させたバッグや袋などを販売。ボランティアで石巻に来た新潟市民の縁で新潟の祭りで販売。同市のデザイン事務所、U-STYLEがイメージキャラクター作りを提案。ばっばが胸を張って「負けねど」と誓うデザインの“ばっばグッズ”が誕生。商品は、震災時に感じた水が飲める幸せとご飯が食べられる幸せなどを5つの豆で表現したストラップ「幸せの豆」、メッセージと鹿妻地区などの被災写真で構成する「ばっばの幸せ本」など。

＜学生の声＞私が担当で手伝いをしたばっばコーポレーションの方々はやさしく、とても楽しくサポートできたと思います。コーポレーションの皆さんは独特の営業トークを持っており、商品だけのことを話すだけではなく、世間話などを混ぜながらお客さんに商品を販売していて、私は深く関心を持ちました。（亀山清太）

◇マザーミザンガの会（大和美代子代表）

雄勝町名振で被災した女性たちが避難所で、魚網の補修糸などを使って手作業でミサンガを製作。ミサンガは手首や足首に結び、自然に切れれば願い事が叶うとされるが、あえて簡単には切れないことに支援者との「絆」の意味を込めた。ミサンガを編み込んでいる時は無心になれ心の安定剤のようだという。もちろん、収入が得られれば生活再建の力にもなる。早く復興することが支援して下さる皆様への恩返し。

＜学生の声＞一番大切だと思ったことは、自分たちの売っていた商品に興味を持ってもらうことです。商品がどのようなものでどのような経緯でできたのかを調べることは必要だと感じました。（大瀧裕也）

◇NPO法人みなとまちセラミカ工房（阿部鳴美代表）

「色を失くした街をスペインタイルで明るく彩る」という夢に向かってスタート。「女川スペインタイル」には“つながる”というテーマがある。震災後、スペイン視察などをきっかけに工房が誕生。全国の応援者との絆を大切にしながら、時には震災前の女川を思い出し、また女川の未来に希望を抱きながらタイルを製作。

＜学生の声＞セラミカさんは女川で活動しており、色とりどりのスペインタイルを用いてなべ敷きやコースター、マグネットなどを製作し販売していました。強い雨と風の影響により残念ながらお客さんの製作体験はできませんでしたが、色鮮やかなスペインタイルを買ってもらいました。店舗の位置がお客さんの動線から離れていたため、それは改善が必要と思いました。（渋谷悠杜）

◇末永海産㈱（末永勘二社長）

設立年月 1986 年 1 月。資本金 3,000 万円。宮城県石巻市塩富町 2-5-73。水産加工販売。本業は生牡蠣の流通にかかわる仕事。近年は牡蠣やワカメの新商品開発も手がける。この日は社長の実兄（養殖業）が案内に協力。＜学生の声＞私は、末永海産㈱で牡蠣の養殖について紹介をしに行きましたが、客船からのお客さんは一人も来ていただけませんでした。ですが、みやぎ観光復興支援センターのお二人が来てくださり、DVD を見て牡蠣養殖の作業現場で、養殖に使うホタテの殻を見ていただきました。企画自体は好評でした。（三國翼）

◇「石巻 3.11 あすのためのミュージアム」

宮城エクスプレス株式会社（代表取締役 宇都宮博行）内。同社は東日本大震災時の会社ぐるみでの避難・救出・助け合い行動に対して公益財団法人社会貢献支援財団から平成 24 年度社会貢献表彰を受けた。津波対策ビルとして社屋再建後、震災の記憶と記録を後世に伝えようと社屋 5 階フロア全体をミュージアム化。非営利団体「石巻 3.11 あすのためのミュージアム」が運営。

桑浜小学校を自然学習の場に

5 月 9 日（金）、宮城県石巻市雄勝町の旧・雄勝町立桑浜小学校（現在は民間所有）に東京からのバス 1 台分の私立桜丘高校の修学旅行生が集まりました。ボランティア活動を行ったのです。

東日本大震災前の雄勝地区は約 4300 人ほどで、さらに、過疎化や少子化が進んでいましたが、津波の被害により人口は約 1000 人にまで減少してしまいました。子供の数が減ったため、旧・桑浜小学校は平成 14 年度末に閉校していました。

その旧・桑浜小学校を再生させようと活動をしているのが、公共社団法人 Sweet treat311 です。元商社マンだった代表理事の立花貴さんと、子どもが仕事を学ぶ施設「キッザニア東京」創業メンバーの 1 人である理事の油井元太郎さんたちの団体です。この日は油井さんが現場にいらっしゃいました。廃校後、管理が行政から民間に移り放置されていると聞いた Sweet treat 311 のメンバーは、「雄勝での活動の幅をさらに広げたい」と考え、この小学校を購入し、「雄勝学校再生プロジェクト（仮名称）」を始めました。

このプロジェクトは、校舎を修復・改修し、新たに複合施設とし、全国の子どもを対象に自然の循環や伝統を体感し、たくましく生きる力を育むための環境社会学校を目指しています。少子高齢過疎化の象徴である廃校を再生させ、さらに学校だけでなく宿泊や飲食、コミュニティースペースも設け、滞在型の学び施設として地域住民と運営し、学びを通じて雄勝が世界に注目され、世界中の人々に訪れたいと思われる「まち」を作る取り組みをしています。

東京の高校生たちの活動内容としては、丸太の皮を剥ぐ作業、校庭にある砂利を袋に入れる作業、にわとりを入れる囲いに使う竹の枝を切る作業でした。それぞれの作業自体は、決して楽しいわけではありませんが、高校生たちは丁寧に仕事をしていました。

また、私たち大学生も少し畑を耕す作業を手伝わせていただきました。その畑には蕎麦を植えて施設に来た人と収穫をして蕎麦打ち体験をするそうです。Sweet treat311 では、様々な方法でたくさんの人に雄勝町に来てもらうことを考えています。

被災地の方を始め、東北圏外の方々が被災地に来てボランティアをすることで色々な人と出会い、繋がり、被災地について知ってもらえれば良いと思います。（三國翼）

